

## 第5回 将来ビジョン検討会議 塚本氏スピーチ概要

### 「県民のライフスタイルの特徴、変化」

- ・福井県は暮らしやすいことで有名である。また、共働き率が高い、しかもその中で合計特殊出生率が高く、晩婚化、非婚化が言われる中で非婚率が低いという特徴がある。
- ・今後恐らく、片働きで生計を立てていける時代ではなくなり、共働きがトレンドにならざるを得ないことを考えると、いかにして次の世代の労働力を確保していくのが課題となる。
- ・さらに、小中学生の学力が全国上位で、全国的に注目されるモデルである。これらの特徴はある種の結びつきの中で相互作用して出来上がっている現象であると言える。
- ・福井県が豊かな県であることは各種統計データで明らかであるが、アンケート調査によると福井県で暮らし続けたい方もたくさんおり、主観的な満足度、幸福度も高いと言える。
- ・福井県の特徴を考えるうえで、一番のキーとなるのは定住性の高さである。このことにより、三世代同居率が高かったり、持ち家比率が高かったり、大きかったり、共働きが多かったり、兼業農家が多かったり、これは共働きの成果であるが、世帯あたりの実収入や貯蓄が多く、経済的にも豊かであると言える。また、地域の間人間関係が都市部に比べて維持されており、地縁的な人間関係を媒介にしたボランティア活動の活発さもある。さらに、未婚率の相対的な低さ、合計特殊出生率の相対的な高さも注目されることになる。
- ・これらの社会的な特徴が基になり、福井県全体で見た時に、安定性、均質性が高いと言える。また、ある種の保守性に繋がっている面もある。
- ・福井県のライフスタイルの特徴がどのように形成され、関連しあい、維持されているのかというと、福井県の地理的な位置が重要であると考えられる。福井県は京阪神と名古屋という2つの大都市圏まで半径200キロの、遠からず、近からずの絶妙、微妙なバランスに位置している。
- ・大都市圏にもっと近いと、東京都言えば埼玉県、千葉県、東海地方で言えば三重県、近畿地方で言えば滋賀県のように人口流入が激しくなり、通勤圏に含まれベッドタウン化していく。また、若年単身者が多く流入し、核家族世帯の増加で

待機児童が増える問題が発生してくる。地価上昇もある。

- ・逆に都市部から遠い場合は、所謂、過疎化、就学・就職を契機に若者が流出していく、その結果、高齢世帯が増えるといった問題が発生してくる。
- ・福井県は、人口転入率、転出率とも全国第44位で、入ってくる人が少ない代わりに出て行く人も少ない。出て行く人口の方が多いのだが、過疎化が県内全体で進んでいる状況ではない。
- ・さらに、男女別の移住経路をみると、実に男性の5割以上が生まれ育った市町村から一歩も出ずに暮らしている。また、男女とも他県の市町村からの流入は1割程度しかない。男女を比較した場合、女性は、傾向として婚入が多いと思うが、女性は県内での結婚に伴って移動している。
- ・男女ともあまり動かないので、地域コミュニティとの関係を見た場合、参加率がかなり高い。特に男性の参加率が高くなっている。
- ・男性が地縁を支えていることが福井県の大きな特徴と言える。都市部においては男性は職場での人間関係しかなくて一旦仕事をリタイアすると、一気に人間関係が希薄化してしまうことが大きな問題になってくる。福井の場合は地域の人間関係が分厚く、しかも男性も人間関係志向を豊かに持っており、老後が豊かになると思われる。
- ・福井県は通勤圏がほぼ県内で完結しており、通勤時間は片道30分未満で行ける人が73%いる。
- ・世帯構造について言うと、よく三世帯同居が多いことが注目される。確かに全国平均の倍以上なので当然であるが、それでも2割であり8割は三世帯同居ではない。その中で福井県の特徴は、自分の親や子どもがすぐ近くに住んでいることで、車で30分以内が6割程度ある。福井で共働きと子どもを産み育てることが両立可能である背景はこのことにある。
- ・三世帯同居率は福井県でも年々減っており、学生へのアンケートによると、自分の親や結婚相手の親と暮らしたくない方が多いという結果が出ている。また、三世帯同居では若い世代のストレスが多く、精神衛生上良くないというデータが出ており、今後益々減っていくだろう。
- ・すぐ近くに親が住んでおり、何かあった時に、助け合う、サポートしてもらう「ウィーク・タイズ」があることが、福井の家族関係の大きな特徴であると言える。

- ・福井県は人口10,000人当たりの社長輩出数が全国一位であるが、言い換えると中小企業が多いということである。働く場所が非常に多く、仕事が無いという状況ではない。また、第二次産業の占める割合が多い。
- ・共働きが多いのが福井県の特徴であり、働く場所は豊富にあるが平均収入は男女とも全国を下回る構造になっている。福井の女性が勤勉であることは、伝統的に繊維産業を支えてきた歴史的経緯などから有名である。現在の産業構造的にも、女性を労働市場に押し出す要因、引き込む要因がビルドインされており、共働きにトレンド化し易いといえる。
- ・女性の年齢別労働力率は日本の場合はM字型を描くとされているが、福井県の場合は先進国型に近い台形になっており、子育て期に離職しない傾向にある。三世帯同居や近居による親からのサポートが要因となっている。
- ・地域社会学の中で「混住化」という言葉を使うが、かつて農村であった所で農村的なライフスタイルを持つ者とサラリーマン的なライフスタイルを持つ者が混ざって暮らしていることである。福井県の場合は典型的な「内からの混住化」であり、他所からサラリーマンが入って来たわけではなく、かつて水田農家であった者がサラリーマン化しているのである。
- ・共働きの成果としては、福井県は三世帯同居が多いこともあり、一人当たりの賃金水準は高くないが、世帯あたりの働き手が多いので収入や預貯金額が多くなっている。
- ・福井県は地域コミュニティが比較的機能しているので、地縁、ボランティア活動も活発に行われているという特徴がある。
- ・雇用の流動化が進み、男性一人の収入で生計を立てるのは今後益々難しくなってくる。ある意味、共働きは安定しているので、共働きを前提とした社会のあり方を考えていかなければならない。
- ・OECD加盟24カ国の女性の年齢別労働力率と合計特殊出生率の関係をみると、女性の労働力率が高い国ほど、合計特殊出生率が高い傾向にある。女性が働きながら子どもを産み育てられる社会にならないと、家族が子どもを産み育てるという選択をしなくなっていると考えられる。
- ・女性が働きながら子育てができるのは、福井県の熱心な社会的サポートによるもので、「隙間なく行っている」という表現で言われる。それ以外に、福井県における育児分業のデータをみると、最近、育児に喜びを見出して積極的に関わって

いく若い男子を「イクメン」と呼び、男性間で比較すると、乳幼児の世話の参加率が高くなっているが、それと比較しても、60歳以上の女性の参加率が高い。要するに親世代、特に母親のサポートがあり、福井県の出生率の相対的な高さは、夫婦間の水平的な分業よりも、世代間の垂直的な分業によって支えられていると考えられる。

- ・家事分業をみると、男性はあまり家事をしていないというデータがあり、ある意味、福井県のライフスタイルを支えているのは女性の頑張りであると言える。女性は、家事、仕事、育児と多重負担になっており、女性の意思決定過程への参画が進んでいない現状である。
- ・今後福井がどう変わっていくのかを考える時に一つの柱として考えていいのは、女性の声、福井に他所から入ってきた人の声をいかに地域社会に取り込み、関係性を多様化していくかである。このことが今ある福井の強みをさらに活かしていくうえで重要ではないか。

以上